・愛知川流域の農家民泊受入れ住民との連携・交流

・滋賀の食文化の共有化を目指し、魚のゆりかご水田米と琵琶湖産ニゴロブナによる鮒（ふな）ずし漬け講習会の実施

・魚道、水田で育つ稚魚の現地視察受入れ

〈鮒（ふな）ずし漬け実施講習会の実績〉

年度	参加家族数
H27	13
H28	15
H29	16
H30	15

・地元子ども会、小学校への環境教育・食農教育の実践

・魚道作り、魚道の見学、ゴミ拾い等を通じた環境教育の実施

・田植え・生き物観察会・稲刈り等の体験及び地域住民等との交流活動、学習会の実施

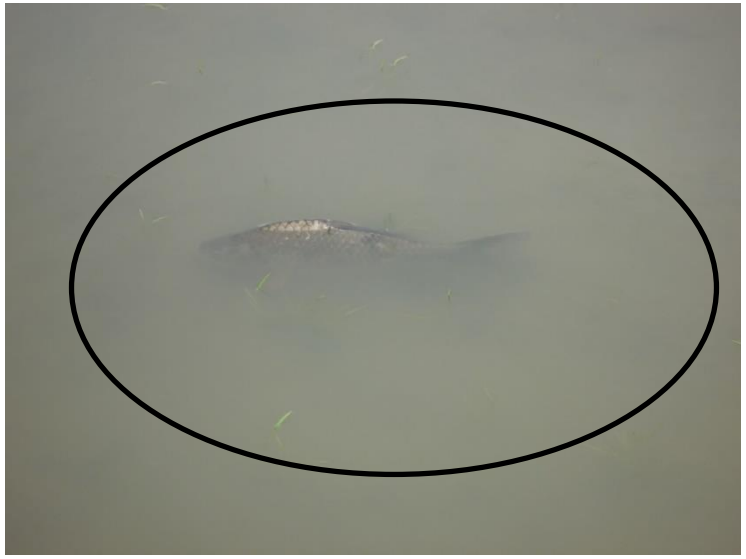
・魚のゆりかご水田米の米粉を用いた調理実習・ 学校給食への米の提供など出前授業を通じた環境教育・食農教育の実施

取組の効果・地域への影響

〈生態系の保全〉

琵琶湖の水産資源の保全、水質保全への貢献

① 魚道設置により、ニゴロブナ・ナマズ等の魚やカエル等の水生生物が田んぼに上がり、 産卵・ふ化し稚魚が育って（20ミリ）琵琶湖に帰る→琵琶湖の生き物の繁殖、保護のための重要な場の提供



② 近年、大きな 問題となっている外来魚（ブラックバス・ブルーギル）には、水路を遡上する習性がないため、琵琶湖固有種であるニゴロブナ・ナマズ等の在来魚の保全保護・再生に役立っている→琵琶湖漁業の振興に大きく貢献

③ 常に地元の子ども会との協働によって進めており、子ども達、親世代の方々にとって多様な生き物と共に暮らす、地域の自然環境保全への理解が深まる

④ とことん環境にこだわった農業の徹底した推進 →
水田環境の再生、琵琶湖の保全への貢献

〈農漁業への影響〉

・米作りオーナーとの交流活動、イベント時の野菜即売等を通じた、地元農産物PRの推進

・魚にも人にもやさしい環境にこだわった村あげての米作りによる、ブランドの確立と有利販売ルートの確保

・鮒（ふな）ずし、粽（ちまき）作り、しじみの味噌汁、エビ豆の煮物等、滋賀の食文化の再確認と次世代への伝承、県内外への発信

〈住民・地域への影響〉

- 環境こだわり農業に取り組むことの重要性の認識の深まり
- 釜でご飯を炊く、粽（ちまき）作り、地域住民等との交流活動での手作り野菜の提供等、高齢者の活躍、お年寄りのパワーの再確認
- 活動に集落あげて取り組むことによる、住民の一致団結心の再生、高い志の育み、地域のアイデンティティーの確立、ステイタスの向上

4.活動の広がり

（1） ６次産業化の取組み

・魚のゆりかご水田米の米粉を使った洋菓子の製造販売

・老舗酒造メーカーとの連携による日本酒造り

平成28年魚のゆりかご水田で酒米（山田錦）の栽培開始

平成29年３月新酒の醸造販売開始

（酒米栽培面積）

年度	酒米栽培面積
H28	60a
H29	80a
H30	80a

（日本酒醸造、販売実績）

平成29年　720ml瓶　2,147 本

平成30年　720ml瓶　520本（現在販売中）

（2） 農業高校との新たな連携

・平成30年3月、農業高校生が一筆型魚道を製作し、水路に2ヵ所取り付け

5.今後に向けて

・次世代を担う子ども達を巻き込んだ生き物と共に暮らすこの土地ならではの活動と相まって、食と農の大切さや、琵琶湖の水産資源、水質の保全への意識の高まりによって、子ども達や親世代に対し、ここで生まれて良かった、育って良かったという地域愛と地域の誇りを育むことに繋がって来ている

・因みに、平成28年から20歳代の若者が自ら志願して、魚のゆりかご水田協議会の特別サポーターを務めてくれるようになり、今後、この若者を核として、さらに1人、2人と若年層の参加の輪が広がってくれることを期待

→ 次世代への活動の継承

魚のゆりかご水田プロジェクト
栗見出在家町
魚のゆりかご水田プロジェクト